

栄光

説教・「祝福の群れ」	木村太郎牧師…1
特集・クリスマスの願い	……………2
説教・「希望」	岸俊彦牧師…4
合葬式報告	……………5
召天者記念礼拝報告	……………5
追悼・田中貞子姉	……………6
木村太郎牧師との懇談会報告	……………6
教団総会報告	……………7
長老のファイル	……………7
牧師の書齋から	……………8

『祝福の群れ』

説教

イザヤ書30章15節～17節
ルカによる福音書24章36節～53節

宇都宮教会牧師 木村太郎

復活のイエス・キリストは、弟子たちに向かって、「あなたがたに平和があるように」(36節)とお語りになりました。これは、「シヤローム」という言葉であり、ユダヤ人たちが日常生活の中で使う挨拶です。しかしここでは、キリストがご自身の十字架の死と復活を通して与えてくださった恵みについての言葉です。

その恵みとは、神とわたしたち人間の間に打ち立てられた平和であり、キリストによる罪の贖いを通しての神との和解です。言い換えれば、神からわたしたちを引き離すものは何も無いという平安です(ローマ8・38、39)。

教会に、そして教会に連なるわたしたち一人ひとりに与えられて

共に歩むことはできなくなるのです。新しい出発をしなければならぬのです。そういう弟子たちに向かって、キリストはあらゆる恐れからわたしたち人間を解放つ、真の平和についてお語りになりました。

では、その平和をどのようにして確信していくのでしょうか。それは、キリストが生きておられると信じることを通してです。そのことが続く言葉の中で伝えられています。キリストは、「ご自身の手と足をお見せになることを通して、十字架の死から甦られたことを明らかにされます(ルカ24・40)。

それだけではありません。弟子たちがなおも信じる事ができないでいると、キリストは、「ここに何か食べ物があるか」とおっしゃり、「焼いた魚…一切れ」を弟子たちの前で食べられるのです(41～43節)。

ここで強調されていることは、キリストの身体の甦り、肉体の甦りです。つまり、霊的な甦りの否定です。それは、弟子たちが「恐れおののき」、「霊を見ている」と

思い込んだからです(37節)。それはまた、キリストご自身の「霊には肉も骨もないが、あなたがたが見ているとおり、私にはあるのだ」(39節)との言葉からも分かれます。

キリストは、霊的な甦りを否定し、ご自身の身体の甦りについてお示しになります。それは何よりもまず、キリストが事実、生きておられるということです。そしてまた、生けるキリストが、弟子たちの群れの頭、つまり教会の頭となつてくださり、同時に、キリストご自身の身体としての教会の営み全てを導いてくださるということでもあります。(エフエソ1・22、23)。

キリストは、弟子たちの群れの新しい出発に際しての準備として、信仰の土台としての神との平和と、生けるキリストこそが弟子たちの群れを先頭に立つて導いてくださるという確かさをお示しく下さいました。その恵みを繰り返して信じさせていただくことにこそ、この世の終わりに向かつての教会の歩みが、揺るがないものとなるのです。

クリスマスの願い

2024年は元旦に大きな地震が起き
夏には猛暑・豪雨があり、災害の多い年でした。
世界各地では今なお紛争が続いています。
この1年を振り返り、あなたがクリスマスに
願うことは何でしょうか？



世界の平和

久保田あけみ

今年のクリスマスに願うことは一言、「世界平和」です。春に夫の国イランへ行く予定でしたが、イランとイスラエルの衝突が騒がれ、急遽キャンセルとなりました。夫はすでにイランにおりましたので日本へ出国できるかどうか心配しましたが、無事日本に戻ることが出来、安堵しました。

2022年にマサ・アミニさんが正しくヘジャブ（スカーフ）を着用しなかったことで、道徳警察に逮捕され死亡したことを発端として、イランの各地で現政府に反対するデモが起こりました。その年の秋に私たちがイランへ行った時、若者たちはSNSでデモの参加者を募り、あちこちでデモ行進をしておりました。女性たちもスカーフを着用せず自由に闊歩しておりました。イランで何かが変わっていくことを実感しました。

1978年のイラン革命から46年

が経ち、イラン国民は現政府が変わることを切望しております。

現在イランとイスラエルの戦争が騒がれる中、物価の高騰がひどく、人々は日々の生活に追われています。イラン人はペルシヤ民族なのでアラブ民族であるハマスとヒズボラ対イスラエルの戦争には関係なく、支援には反対です。その資金でイラン国民の生活を守って欲しいと言っております。国民の不満とイスラエルとの狭間で、現政権はどのように舵を切っていくのでしょうか？ アメリカの新大統領はトランプとなりました。

不確実な将来に向かって計画を立てることは困難です。そんな中でも、私たちは来年の春にイランへ行く予定しております。それも大した用事ではなく、引越しの整理のためです。世界には戦禍の中で明日の命も分らずに毎日を通っている人々が多くいます。

祈っていても何も起こらないと思ってしまうですが、やはり祈ることしかできません。聖歌「主の愛は私を慰め、日々喜びに満ちます。私の生活は御手によって日々導かれる」。すべて主に任せします。

クリスマスに願う

稲葉陽二

私と家内は礼拝にリモートで参加させていただいており、それを支えてくださる兄弟姉妹、牧師先生に感謝しています。礼拝では司式が毎回、私たちが御言葉から離れた行いをしていると告白し、懺悔しています。私も転会前の教会で司式を仰せつかっていた時は、同じことをしていました。よく考えるとこれは大変情けないことです。ですが、人は年を重ねれば重ねるほど、御言葉だけではなく他の事柄についても、あるべき姿から離れることが多々あります。誠に不本意なことですが、できれば避けたいのですが、まるで自分の中に別の自分があるようでさえあります。どうしてそうなるのか。

考えている結びつきと異なる結びつきの組み合わせを呈示されると、回答に時間がかかるという理屈です。たとえば人種テストでは、黒人と心地良い言葉、それに白人と不快な言葉を対比させると、逆の組み合わせで問うた場合、つまり「黒人と不快語」と、「白人と快語」との対比よりも回答に時間がかかることが明らかにされています。具体的には、白人を快語と結びつけ、黒人を不快語に結びつけるほうが、被験者の65%がより短時間で回答でき、逆のほう、つまり黒人を快語と結びつける方が短時間で回答できた被験者は全体の35%にすぎなかったことが報告されています。これは、プロジェクト・インプリシットというハーバード大学の研究者の流れをくむNPOが過去5千万人を超える被験者に対し実施した結果です。

これは一般的には、集団を一括りにしてその性質を決めつけるステレオタイプが明らかにになるということで、私の中の潜在的偏見、私の中に住むもう一人の自分をどうしてなくしていくのかは、大きな課題、願いです。

クリスマスの願い

小田 麦

クリスマスが近づくと、不思議とワクワクする気持ちになります。子どもの頃はキリストの誕生日よりもサンタクロースからのプレゼントの日という意識の方が強かったせいかもしれません。今でも妻からプレゼントはもらえませんが、連休前の忙しい仕事も加わりました。

今年、昨年の11月に生まれた子どもにとっては2回目のクリスマスです。生後1ヶ月で迎えた昨年のクリスマスは大人の食事中に限らず泣いてばかりでした。今年は笑っている時間もあるかもしれませんが、遊んで欲しいとやはり泣いているかもしれません。まだまだ教会のこともわかっていませんし、アーメンすら言えません。

毎年当たり前のように行っていた教会も教会のクリスマスも、広島に行つてからは遠くなってしまいました。小さな頃はご飯が遅くなるからあまり好きではありませんでした。この季節が近づくと、蝋燭や小さな懐中電灯を照らしながら行うイブ礼拝を思い出します。

広島に来てからはテレビ画面を通してオンライン礼拝に参加しています。礼拝が終わると皆さんが手を振つてくださる姿を見て懐かしさを感じる日々です。また妻と子どもも一緒に礼拝堂で礼拝を守れる日がくればと思います。そのときもまた子どもは泣いているかもしれません。

この当たり前の時間が子どもが大きくなっても続いていけばいいなと思います。不安な世界情勢に若者の非行など、人間や人間が起こす問題だけでも十分に厄介ですが、それだけでなく異常気象をはじめとする自然災害など、未来の不安は増えるばかりです。不安なときもそうでないときも、教会と繋がり、キリストと繋がる日々を過ごせればと思います。何かと理由をつけて遠ざけてしまう弱い私ですが、どのような形でもキリストと繋がり歩むことができることをこれからも願います。

説教

『希望』

申命記8章2節～10節
ローマの信徒への手紙5章1節～5節

岸 俊彦

「苦難、忍耐、品格（練達）、希望」は、山あり谷ありの私たちの人生です。「品格」は英語では「キヤラクター」です。その人らしさ、その人の特質を意味します。それぞれの賜物があり、それぞれの人生です。私たちそれぞれのキヤラクターを形作っているのは、主なる神の恵みです。

パウロは私たちが礼拝する主なる神を「平和の神」と呼びます（ロマ15・33）。手紙の挨拶で「私たちの父である神と主イエス・キリストから、恵みと平和があなたがたにありますように」（1・7）とパウロは祝福します。この世界の真つ只中に来てくださったキリストこそ主の平和の実現です。問題だらけの世の中、困難な私たちのただ中に、キリストが人となつてくださった、この出来事こそ恵みの出来事です。この恵みの出来事によって、私たちは神との間に平和

を得ています。この神との平和を神との絆と言ってもかまいません。この絆のゆえに私たちは、この地上の混乱の中で慌てることなく、平静に生きることが出来ます。祈って何になるかと言われようと、祈り続けることができます。地上の混沌と私たち自身の混沌の中で、主の平和を創り出す者として、主が私たちを用いてくださいます。「平和を造る人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ5・9）と、キリストは私たちを祝福してくださいませ。天上で礼拝する愛する兄弟姉妹は、祝福され、主の平和が実現することを希望として、御言葉に堅く立つて、その生涯を歩み抜かれまし。主の祝福、主に對する信頼、御言葉を信じる信仰が、苦難に耐え、それぞれのキヤラクターを造りあげました。「私は復活であり、命である。私を信じる者は、

死んでも生きる」（ヨハネ11・25）このキリストの言葉を信じ、慰められ、励まされ、私たちの真の故郷、天まで歩み抜かれました。

「私の後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を負って、私に従いなさい」（マルコ8・34）とキリストは弟子たちに語りました。キリストに従うことは、信仰の故の苦難があります。外的な苦難とともに内的葛藤があります。それゆえ忍耐を必要とします。忍耐の源は神の言葉です。「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」（申命記8・3）のです。私たちは、真の命の言葉であるキリストを食べて生きるのです。キリストが私たちと共にいてくださいます。私たちの重荷を共に担ってくださいませ。このキリストのおかげで、「神の愛が私たちの心に注がれている」と信じるこ

じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ3・16）。この神の愛が私たちに溢れるほどに注がれています。

御国にある兄弟姉妹は、その生涯の日々においても、また御国の門に立たされたときも、「信じます。信仰のない私をお助けください」（マルコ9・24）と、ただ主の憐れみに頼ることができたのです。私たちも、死の先に至るまでの日々、主の憐れみに縋って、「信じます。信仰のない私をお助けください」と願ひ祈り続けるのです。「苦難、忍耐、品格、希望」、この道筋をキリストが開いてくださいました。キリストによって、神との間に平和を得ることが出来る信仰の道筋です。キリストのおかげです。聖霊の導きです。神の愛によって備えられた御国にいたるまでの信仰の道、キリストの道です。この道を歩みとおして主の恵みの刻まれたキヤラクターとなつた、愛する家族、兄弟姉妹にならつて、私たちも、終わりの日を持ち望み、この道を、信仰によって、共に一歩一歩進んでいきましよう。（石天者記念礼拝）

合葬式報告

二度目の合葬式

柴田路子

昨年の合葬式では出てこなかった父の遺骨。今年は岸先生のご尽力もあり、無事に見つかり合葬することが出来た。日々の生活の中で、殆ど思い出すこともなくなっていた14年前に亡くなった父との思い出に、合葬式に出席したことを機に、懐かしく改めて思いを馳せることが出来た。

少し前に、母と姉の3人で食事をした帰り道、子どもの頃に住んでいた辺りをドライブすることになった。そこは住宅街の細い道を進み、更にとても狭い路地の奥にあるアパートで、今もまだ現役で建っていて人が住んでいる。ご近所の方のお宅を訪ねてみると、お元気で懐かしい顔を出してくださった。すぐにお喋りが始まった母をそこに残し、姉と少し歩いた。昔と同じ建物は殆どなく新しい家が並んでいたが、当時の記憶をたどりながら、そこでの暮らしを姉と語り合った。まだ若かった父と母。子育てや仕事に忙しく過ごし

ていた時代に生活していた場所。私はそこにあつた父母の仕事場が好きで幼い頃はいつまでもそこで遊んでいた。キラキラした布やビーズなど、お宝の宝庫だったから。そのあと何度か引越しをして、父が最期を迎えたのは今、母が住んでいる場所だ。父にとつてどこでの暮らしが一番楽しかっただろうか。姉と訪れた狭い路地の奥にあるあのアパートであつて欲しいと思う。私たち姉妹にとつては、思い出がたくさん詰まった場所だから。経堂北教会の日曜学校にも、そこから自転車を通った。忘れかけていた父との思い出や、子どもの頃のことを、合葬式や懐かしい場所を訪れたことで改めて思い出すことが出来た。岸先生をはじめ、教会の方々に感謝申し上げます。



召天者記念礼拝

大伯母と召天者記念礼拝

牧内 歩

今年の3月3日に大伯母である赤木直美が逝去いたしました。93歳でした。慢性心不全でした。大伯母は牧師の長女として、1930年に北海道出雲教会で生まれました。その後、父の転勤で広島に移住した赤木家は、原爆が投下される1週間前に父を市内に残し疎開します。原爆が投下され、母

は父を捜索するために市内に戻ることにになり、当時15歳だった大伯母は4人の弟と妹たちの母親代わりとして家族を支えました。戦後は、広島女学院大学を卒業し、英語教師として近江八幡学園高校で教鞭をとり、高校教師を辞した後

は実家のめぐみ幼稚園で経理とピアノの先生として働き、父が設立した赤木学園の運営を引き継いだのち、55歳の時シオン幼稚園を設立しました。また、母教会であった広島西部教会ではオルガニストとして奉仕をしました。

私にとつての大伯母は、祖母の兄弟姉妹の中でも特別な存在で、

まるで第二の祖母のような人でした。頻繁に会っていたこともありますが、大伯母に家族がなかったことが大きいと思います。仕事一筋のキャリアアウーマンだったので、学園とこの園児たちがずっと家族や子どものような大きな存在だったのだと思います。

大伯母とは広島に帰省するとよくゲームをしました。トランプゲームやボードゲームで私が小さい頃から全く手加減をしてくれない負けず嫌いな人でした。また、とてもおしゃれが好きなお人でもあり裁縫家である祖母にオーダードで洋服を作らせてはそれを着こなしていました。

大伯母が亡くなってもう9ヶ月になりますが、いまだに大伯母が生きているのではないかと思うほど存在感の強い女性でした。苦勞の絶えない93年だったと思います。ぜひ天国でゆっくり休んでほしいと思います。

最後に大伯母は経堂北教会員ではありませんが、春秋苑の教会墓地への納骨、召天者記念礼拝での掲額を受け入れてくださり感謝しております。

追悼

ご挨拶

故・
田中貞子姉

母は2024（令和6）年9月3日火曜午後12時39分に旅立ちました。その日の午前中、私が面会して、帰路についた時でした。面会の時「もう無理しなくていいよ、あちらでお父さん、お母さんとゆつくりしてね」と声をかけたとき微かに頷いたように思えました。それからわずかに約1時間後のことでした。

長年、居を構えていた栃木烏山からこちらに移り、父を見送ったのち、これまでの数年間、同居をしてみいました。

「百歳までもう少しだね」
こう問いかけると
「今は全然、逝く気がしないよ」と冗談交じりに答えていました。

初冬の頃、自室から白銀に輝く富士を眺めながら

「ああ、ここにきてよかった」と呟いた母の一言が今も聞こえてくるようです。

しかし、「人生は思うようにはいかないものだ」と、今更ながら痛感しています。多忙にもかかわらず母の良き相談相手として、心のこもった対応をしていたいただいたケアマネージャー様のお支えの中、穏やかな時のなかで、他愛もない会話を楽しみ、七夕飾りの夏祭りの賑わいも一緒に満喫して、「さあ、あと2ヶ月！」と思っていた矢先の出来事でした。

母も今、私とともに皆様方の長い間のご厚情に対し、深い感謝と心よりの御礼を申し上げていると確信しております。

最後にあたりまして、母の辞世の句をご紹介させていただきます。ご挨拶とさせていただきます。

長月の 月に出逢えず

「月光」を聴く

病床に伏す 悲しき哉 吾

（長女 細田雅子）

木村太郎牧師との懇談会報告

木村太郎先生（以下、慣れないので、タロウ、と書かせてもらおう）とは、同い年。30年前、タロウが

神学生として経堂北教会に来たときは、私も学生であった（若かった）。タロウが当時住んでいた東神大の寮にも遊びに行った（こんなところにヒトが住んでいるんだ！と驚いた。今は新築）。広島での青年平和の集いにも一緒に参加した（タロウのせいで、観光もできずに帰って来た）。結婚パーティーの司会もした（雪だったし、大変だったねえ）。最初の赴任地となった南国教会には赴任時に訪れ、引越しの手伝いもした（教会のクルマがマニュアル車で、運転に四苦八苦したのは良い思い出）。数年後、タロウがVancouverに勉強しに行くと、何度も遊びに行った。私のアメリカ留学時の最初の遠出もタロウ訪問だったし、Whistlerにスキーをしに、Seattleにイチローを観に（タロウの友人にイチローの家に連れて行ってもらうことができたのは、タロウのおかげ）。帰国して宇都

宮教会に赴任すると、また、何度か訪れている（餃子をご馳走にもなった、ごちそうさま！）。まだまだ書ききれない。

懇談会でタロウが話していたように、東日本大震災により半壊となった宇都宮教会は、建て替え後、十字架のない礼拝堂となった。実際にその礼拝堂を訪れたことがあるが、最初は正直なところ違和感を覚えた。しかし、教会がその礼拝堂に込めた思いを知ると、その意図が理解できた。それは、魅りのキリストを信じる、そのキリストが生きる証となつて我々と共にいる、という希望のメッセージだ。タロウは、3年前から聖学院大学でチャプレンとしての働きも担っている。往復4時間の通勤は、天命を知る年齢には辛いはずだ。しかし、「働きの場を与えられていることに感謝して、成長していく場」とタロウは語っていた。当に天命を知つたかのようにだ。タロウの歩みが、いつも魅りのキリストと共にあることを祈る。そういえば、聖学院には行ってないな。今度、講義でもしにいこう。主の導きを信じて。（角田 誠）

第43回日本基督教団総会報告

東京教区選出の総会議員として10月29日から31日の3日間、池袋のホテルメトロポリタンで開催された教団総会に出席してきました。

全国17教区の教職・信徒400名の議員のうち16教区の360名あまりが出席して成立しました。

総会に行く前に、岸先生から少し話を聞いていて事前に分かっていたことですが、沖繩教区の議員団の座席は空席となっていました。1941年に戦時体制の中で成立した日本基督教団は戦後の歩みの中でも複雑な歴史があり、様々な課題を抱え今に至っています。沖繩に関心を寄せてきた自分として、この教団の沖繩問題がどうかならないものなのか、西南支区の常任委員になったころから思っていました。

総会では議事日程から議長提案に対し、異論が多く出されるなどするのを見て、久しぶりにわくわくしてしまいました。大学生当時、自治会活動をしていたこともあり、会議での論争などでテンションが上がってしまうのです。今回

は初めて出席する教団総会だったのに加えて、事前に東京教区選出の議員が集められ、教区議長から今回の総会に対する教区の考えをレクチャーされていたこともあり、とにかく議論のされ方、成り行きを聞いて学ぶことにしました。

3日間行われた総会は、毎日が礼拝から始まりました。1日目はお昼の開会礼拝から始まり、2日目は朝から逝去者記念礼拝、3日目は聖餐礼拝が持たれてから、議事が進められました。3日間の議事、進行では、教会派、社会派それぞれの思いから喧々諤々の遣り取りが繰り返されました。それぞれの思いはあつたとしても神様の御声に耳を傾けて、共に歩んでいくのだとの思いを新たにさせられました。混沌としているのはこの世にある私たちの教会・教団も同じなのです。私たち一人ひとり、聖霊の導きを信じ、終わりの日まで走り続けていきましょう。

経堂北教会で奉仕された片岡宝子牧師、高橋真人牧師も出席していました。それぞれの地に立てられた教会として、共に伝道に励みたいと感じました。(大友太郎)

長老のファイル

岸俊彦牧師の退任まで残り4ヶ月となって参りました。牧師館の改修工事も順調に進行し、来年1月末には改修終了、2月には松谷牧師並びにご家族が入居する予定となっております。

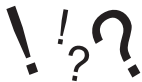
岸先生ご夫妻は茨城県つくば地域に既に転居されていますが、大変なのは経堂北教会とつくばの車での往復です。渋滞がなければ1時間半、高速の渋滞がある場合は片道3時間かかるそうです。日曜日の礼拝、週日の各会の集いと祈禱会のために週に2回往復するとなると、その通勤時間だけでも週のうち約1日分を取られる計算となり、説教や各会の準備など含めて岸先生はほぼ休みなく、休日も働かざるを得ない状況にあります。先日の定例長老会でもそのことが明かされ、岸先生の健康を心配する声が多く上がりました。先生の健康が守られ、無理のない環境で無事来年の3月末を迎えられますようにと祈るばかりです。

来年2月には松谷先生は経堂北

教会の牧師館に住まいながら、麻布南部坂教会の牧会を行うことになりましたが、経堂に住んでおられるので、岸先生と直接の実地での引き継ぎを1ヶ月近くかけて行えるというありがたい状況があります。そういった環境づくりを岸先生が考えてくださったことは本当に感謝に堪えません。何せ42年間もの牧会の蓄積の引き継ぎですから、その内容は膨大なものになると想像に難くありません。

そんな中、先月、経堂北教会では1年で最も出席者の多い召天者記念礼拝と愛餐会が行われました。岸先生ご本人が司会を担ってくださいましたが、この会も長年牧会に携わり教会員ご本人とご家族とも直接関わってきたからこそ、自然にスムーズに全体を把握しながら出来るものと改めて思いました。故人が以前『栄光』で語っていたことこそが生きたメッセージとなり、この会自体をより深い家族としての教会の交わりとしており、この伝統は途切れることなく引き継いでいきたいものだと思います。(大西 順)

個人消息



牧師の書齋から

小学校3年の終わりから中学1年まで静岡に住んでいました。一番楽しい学校生活でした。駿府城内にある学校でしたから、城内小学校、城内中学校でした。そこから静岡高校に進んだ学生は憧れの的でした。駿府公園でマーチングバンドの練習をしていた静高生はまぶしいほどに輝いていました。古希となった機会に、中学の同級生が集まりました。在京の者5

人、男3人、女2人です。もともと、こちらはずくばから世田谷に一泊して、新宿に出かけました。

3年間介護した母親が2ヶ月前に亡くなり、介護ロスのIが中心でした。彼の母親はキリスト者でした。キリスト教の話聞いたのは彼が最初でした。連絡をいつもくれるのも彼でした。中1の担任がキリスト者になり、その息子が牧師となったことを知らせてくれたのも彼でした。彼は教会で行われた担任の葬儀に出席しました。飛行機好きの彼は60歳で退職し、

子どもたちとの飛行機作りのサークルで世話役となっています。

一人は牧師の子で、東京に転校したとき、彼女の従兄がクラスの前席でした。彼が東京での最初の友達となり、教会に誘われました。彼も牧師の子でした。不思議な神の必然と計画です。

Sは東京への転校後、最初に手紙をくれました。彼は学級委員長でした。それ以来50数年ぶりに会うのですから、初対面と同じです。IT関連の会社を起業し、今は会長です。Iと皇居の周りを散歩し

たばかりだ、と話していました。

もう一人の彼女は、昔から落語、相撲、古武道のマニアです。以前経堂の福昌寺で落語会をよく聞いていました。その度に誘われたのですが一度も行ったことはありません。伝道師として赴任したばかりの頃、アパートに最初に訪ねてきたのは彼女でした。今も小さな広告会社を経営しています。

4人のお土産に「イエスの系図」手拭いをプレゼントしました。牧師夫人のYから、早速牧師がCSで使うとのことでした。(岸俊彦)

掲示板



○教会学校クリスマス

12月22日(日) 午前9:00

○クリスマス礼拝

12月22日(日) 午前10:15

○クリスマスイブ礼拝

12月24日(火) 午後7:00

○クリスマス祈祷会

12月25日(水) 午前10:30

○歳晚礼拝 12月29日(日) 午前10:15

説教 久保哲哉教師

編集後記



▽30年ぶりにバルセロナとパリを訪れました。以前より路上で物乞いする人が増えており、移民問題や貧富の差を痛感しました。(酒井)

「栄 光」2024年12月号
 日本基督教団 経堂北教会
 〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11
 電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
 牧師：岸 俊彦
 編集：栄光編集委員会
 Email：kyodon@nifty.com
 HP：http://kyodokita.life.coocan.jp